

ゲルク派の如来蔵観

——未了義とされる如来蔵説——

高田 順 仁

『楞伽經』には「愚者達が無我 [の教示] によって怖れるであろう余地を取り除くため」(bālānām nairātmyasaṃtrāsapadavivarjitārtham (or -vivarjana-), byis pa rnam bdag med pas' jigs par gyur ba'i gnas rnam par spang ba'i don du) および「アートマン説に捉われている外道達を導くために」(ātmaṅvādābhiniṣṭhānām tīrthakarāṇām ākarṣaṇārtham) 如来蔵の教示が世尊によってなされたとする一節がある¹⁾。チベットでは、この一節は如来蔵説を未了義とする典拠の一つとされるのが常である²⁾。しかしながら、他空の説 (RNG, Gangtok, 91a6-98a6) で知られ、「法身と不可分の無限な功德を本体とする勝義の仏がいきとし生けるものすべてに元来まします」(dan dam pa'i sangs rgyas chos kyi sku mi 'bral ba'i yon mtha' yas pa'i bdag nyid sems can thams cad la rang chas su bzhugs RNG, 84b4-5) という如来蔵解釈を呈示し、如来蔵説が了義であると主張する Dol bu pa Shes rab rgyal mtshan (1292-1361) は、この一節のうちたとえば「導くために」とあるのは如来蔵の教示の目的 (dgos pa) を示したものであって、如来蔵説が未了義であることの根拠とはならないと主張した³⁾。次いで逸早く、Dol bu pa によるこのような如来蔵解釈に対して批判を呈示した Bu ston Rin chen grub (1290-1364) は、再びこの同じ一節を取り上げ、如来蔵説が未了義であるとする自説の典拠の一つとした⁴⁾。恐らく『楞伽經』のこの一節は「無我なる如来蔵に準拠すべきである」(tathāgatānairātmyagarbhānusaṛiṇā..... te bhavitavyam, de bzhin gshegs pa'i snying po bdag med pa' rjes su 'jug par bya'o) というこの一節の末文の記述から推して、Bu ston のように解釈する他はないであろう。しかしこの一節をめぐる議論は以上でもって必ずしも完結した訳ではなかった。ゲルク派の学者達は新たな解釈を呈示している。そこで本稿では『楞伽經』のこの一節に対するゲルク派による理解⁵⁾ を考えてみることにしよう。

問題となる『楞伽經』の一節については次いで考察するとして、先にその一節に対するゲルク派の理解を呈示しておきたい。それは、たとえば mKhas grub

dGe legs dpal bzang po (1385-1438) による以下の記述に端的に表わされている。

『楞伽經』と『入中論自注』⁹⁾ とに未了義であると述べられている、そのような如来蔵の教示は、こんにち後代のチベット人達においてよく知られている「蔵の十經」¹⁰⁾ という中の一つであり、『宝性論』(lit.『大乘究竟論』)がその意味を詳しく決したところの『如来蔵説』[に述べられている如来蔵説] それではない。(sTong thun chen mo, *Madhyamika Text Series*, Vol. I, ka 196b3-5)

ゲルク派においても、『楞伽經』のこの一節に述べられている如来蔵説は「文字通りに受け取ること適わない」(LSH, bKra shis lung po, pha 97b1-98a2) と認識されている。しかしゲルク派はこの記述にも明らかなように『楞伽經』において未了義とされている如来蔵説と『如来蔵經』に述べられている如来蔵説は異なったものであると主張する。このように主張されるとすれば、『楞伽經』のこの一節はある種の如来蔵説を未了義とする典拠となりえても、『宝性論』において組織化され、ゲルク派自身が了義と認めるところの如来蔵説 (e.g. *RGV Dar tik*, lHa sa, ga 74a4-75a4. (tr.) [小川 1969: 97-98]) を未了義とする典拠とはならないのである。このように如来蔵説を未了義なるものと了義なるものに分けることは、勿論のこと先行する Dol bu pa および Bu ston 等には考えられていない。したがって、このような解釈は先行する双方の如来蔵解釈に対する批判、是正として、ゲルク派によってまったく新たに呈示されたものである (cf. *RGV Dar tik*, ga 76a4-76b1. (tr.) [小川 1969: 100-101])。

ではゲルク派は『楞伽經』のこの一節に述べられている如来蔵をどのように理解しているのであろうか。『楞伽經』のこの一節では如来蔵説は次のように記述されている。

世尊によって、經典⁹⁾中に如来蔵が述べられている。それを⁹⁾世尊は、本性として¹⁰⁾光り輝き、浄らかであるから、まさしく元々浄らかであり、(1) 三十二の¹¹⁾相を備え、いきとし生けるものすべての身中にあると説き、非常に高価な宝が垢まみれの衣に包まれているように、蘊界処の衣によって包まれ、貪愼痴によって圧倒され、分別の垢にまみれ、(2) 常住、堅固、不変なるもの¹²⁾であると、世尊は説いている。(*Lank(P)*, ngu 94a5-8)

ここに述べられる如来蔵説については「そのままの形では、他のどの經典にも見出だされないようである」が、「一々の句について見れば、類似のものを探し」求めることができるのであって、『如来蔵經』『勝鬘經』などの「従来の如来蔵系

諸經典の所説の要約で」とあるとされるのが学会での通説である¹³⁾。しかしゲルク派はまったく異なった解釈をとる。たとえば、Tsong kha pa Blo bzang grags pa'i dpal (1357-1419) は、この一節に述べられている如来蔵説に対して「常住、堅固なる蔵」(rtag brtan gyi snying po) という呼称を与えている (GR ad MA^v VI. 95cd. (tr.) [小川 1988: 487-491])。このような呼称それ自体は『楞伽經』のこの一節に述べられている如来蔵説と通常の如来蔵説との区別を意識してのことではないかと筆者は考えている¹⁴⁾。この呼称は勿論下線部 (2) に拠っているのであるが、セラ寺チェーパ学堂の新しい教科書の著者として著名な rJe btsun Chos kyi rgyal mtshan (1469-1544) は、このような呼称に対して批判を述べたうえで (*dBu ma'i spyi don*, New Se ra Ed., 150a1-2), 「光り輝き円満なる相好 [に飾られた] 如来蔵」(mtshan dpe gsal rdzogs kyi bder gshegs snying po) と改めている (*op. cit.*, 150b5)。このような言いかえは、如来蔵は偶発的な垢から未だ離れていない状態にあるところの法性 (sems kyi chos nyid) を指すのであり、無為であるから、「常住、堅固、不変なるもの」であるとする mKhas grub rje の理解に基づくものである (*sTong thun chun mo*, ka 197a1-197a3)。

『楞伽經』のこの一節に対する Se ra rje btsun pa の内容把握よりすれば、この一節において問題視されているのは下線部 (1) の方である。「三十二の相」とは仏の徳性 (異熟果) の一つであり、それが如来蔵に備わっているとされている。すなわちゲルク派は、この一句に Dol bu pa の如来蔵解釈に連なる如来蔵説を見出したものと考えられる。ゲルク派では Dol bu pa の如来蔵解釈はしばしば「二種の清浄を伴うもの」(dag pa gnyis ldan), 「常住なる実体」(rtag dngos) として言及される (RGV *Dar tik*, 64b6-65b3, etc. cf. [袴谷 1989 (1988): 256])。

次に『楞伽經』は「經典中に」と述べるが、ゲルク派は「三十二の相を備え」という句をどのような如来蔵經典にその典拠を求めているのかを問題にしなればならない。この問いについて、先の Se ra rje btsun pa は以下のように答えている¹⁵⁾。

いきとし生けるものすべての相続中に、光り輝き円満なる相好 [に飾られた] 善逝蔵があると [述べる] 経とは、『央掘魔羅經』(*Sor 'phreng can gyi mdo*) にそのように説明されているが、主要なものは、*sTong gsum dar yug gi mdo* である。(*dBu ma'i spyi don*, 151a3-4)

このうち『央掘魔羅經』は『宝性論』以前の成立とされながらも (高崎 1974: 218-220), 『宝性論』には引用されない如来蔵經典の一つである。ここに指摘さ

れるとおり、『央掘魔羅經』には「無限の妙なる相好に飾られた無作の仏性が一切有情のうちにある」という『楞伽經』の一句に一致する表現がある (cf. [高崎 1974 : 197])。一方, *sTong gsum dar yug gi mdo* について, このような固有名を有する經典は存在しないが、『宝性論』にも引用され (RGVY, Nakamura Ed., pp. 41-45), 如来智の遍満を説く『華嚴經』「性起品」の一節を指すことには疑いはない (cf. Ruegg 1968 : 508, n.28)。すなわち經名とされたところの *stong gsum dar yug* とは, *stong gsum gyi stong chen po'i jig rten gyi khams kyi tshad dang mnyam pa'i dar yug chen po* に由来する。ここで「性起品」の一節が未了義とされる如来蔵説の根拠として指摘されるのは, 直接には, *Dol bu pa* による經文解釈に拠るものと考えられる。すなわち *Dol bu pa* は, この一節を如来蔵の同義語¹⁶⁾とされる「法身」(『不増不減經』)が, 無限なる功德を備えた, 量り知れぬ仏智を指していると主張するための典拠の一つとして引用されているのである¹⁷⁾。

以上, チベットにおいてしばしば問題とされる『楞伽經』の一節に対するゲルク派の解釈を考察したが, 先にも触れたように, ここで示されたゲルク派の理解は, こんにち学会の通説とされているところと必ずしも一致するものではない。それは先行する如来蔵解釈, 特に *Dol bu pa* のそれに対する批判という背景をもって呈示されたものである。しかしゲルク派によるこのような解釈は, *Dol bu pa* の如来蔵解釈に対する批判としてのみ意義を有するものではないだろう。たとえば「性起品」の一節は批判の対象ともなりうる。周知のように「性起品」のこの一節は如来蔵思想の源泉の一つと重要視されているものでもある。ではそれはどのように理解されるべきであろうか。また『央掘魔羅經』以外にも, 如来蔵が相好を備えていると述べる經典を指摘することも容易であろう。すなわち, ここで考察した如来蔵説に対するゲルク派の解釈は, 如来蔵系經典においては, 必ずしも『宝性論』によって組織化されるような如来蔵理解のみがあったのではなく, 異なった如来蔵理解の系統も存しえであろうことを示唆しているのであり, そしてそのような經典が *Dol bu pa* の如来蔵解釈の典拠を与えるものとなっているとすれば, ゲルク派の如来蔵解釈と *Dol bu pa* のそれとを注意して見分けることが, これからの如来蔵思想研究に新たな局面を拓くことになるのではないかと筆者には受け止められるのである。

参考文献

小川一乗 1969 : 『インド大乘仏教における如来蔵・仏性の研究』文栄堂。

- 1988:『空性思想の研究Ⅱ』文栄堂。
- 下田正広 1986:「プトゥンの如来蔵解釈——『空性論』と『涅槃経』の立場——」チベットの仏教と社会』春秋社, pp. 321-339.
- 高崎直道 1974:『如来蔵思想の形成』春秋社。
1980:「楞伽経』仏典講座17, 大蔵出版。
- 谷口富士夫 1993a:「トルブパにおける了義と未了義』『印仏研』41-2, pp. 904-902。
1993b:『西藏仏教宗義研究第六巻 トゥカン 『一切宗義』 チョナン派の章』Studia Tibetica No. 26, 東洋文庫。
- 伏見英俊 1990:「如来蔵に対するプトンとダツェパの立場』『印度学宗教学会論集』17, pp. 15-30。
1991:「如来蔵に対するプトンの立場』『儒仏道三教思想論攷』山喜房仏書林, pp. 17-30。
- 山口瑞鳳 1982:「チョナンパの如来蔵説とその批判説』『仏教教理の研究』春秋社, pp. 585-605。
- ツルテウム・ケサン1993:「一乗思想と如来蔵思想について』『関西大学) 東西学術研究所紀要』No. 26, pp. 13-50。
- 袴谷憲昭 1989:『本覚思想批判』(1988)『『宝性論』における信の構造批判』大蔵出版, pp. 236-272。
1990:「チベットにおけるインド仏教の継承』『岩波講座東洋思想』11「チベット仏教」pp. 119-151。
- Ruegg D.S. 1968: On the dGe Lugs pa Theory of the Tathāgatagarbha, *Prātidānam*, the Hague, pp. 500-509。
1969: *La Théorie du Tathāgatagarbha et du Gotra, Études sur la Sotériologie la Gnoséologie du Bouddhisme*, Publ. EFEO. 70, Paris。
1973: *Le Traité du Tathāgatagarbha de Bu ston rin chen grub*, Publ.

EFEO. 88, Paris.

注記は割愛せざるえませんでした。筆者にその用意がありますので、ご請求下されれば婉しく思います。

〈キーワード〉 如来蔵説, 楞伽経, トルブパ, プトゥン, ゲルク派

(大谷大学真宗総合研究所)